

カリーヌ・ファン・ライン博士講演録刊行にあたって

菊 地 重 仁

2024年12月17日と2025年3月5日の2度、カリーヌ・ファン・ライン博士講演会が開催された。前者はオンラインで、後者は東京大学本郷キャンパスにおいて対面で実施された（以下、第一講演、第二講演とする）。以下に掲載するのはこれらの講演原稿の翻訳である。

オランダのス・フラーフェンハーヘ（デン・ハーグ）出身であるファン・ライン博士は、オランダのユトレヒト大学およびイギリスのキングス・カレッジ・ロンドンで中世史を学び、2003年にユトレヒト大学に提出した学位請求論文“*Shepherds of the Lord. Priests and episcopal statutes in the Carolingian period*”により博士の学位を取得した⁽¹⁾。指導教員はマイケ・デ・ヨンク教授、副指導教員はロブ・メーンズ博士であった。現在は母校の人文学部歴史・美術史学科で上級講師として教育・研究に従事している。教師としては大学院生たちを積極的にオランダ国外へと送り出している一方、研究者としての自身も国際的な共同研究をしばしば実施しており、ヨーロッパの中世史学界内でカロリング期研究の重要な論者の1人として認知されている。

博士の専門はカロリング朝期のフランク世界を中心とした初期中世ヨーロッパ文化史であり、とりわけ宗教文化や知識の伝播などのトピックに関する研究業績を多く公にしている⁽²⁾。研究においては、宮廷などの政治的・文化的中心やそこに集うエリートではなく地域社会に、また豪華なものではなくより簡素に作られた実務的手稿本に注目するアプローチをとっている。

博士論文以来彼女が関心を持っている研究対象が、地方の村落に住み草の根レベルで活動する司祭たちであり、信徒の司牧など彼らが地域社会で果たした役割の解明に努めてきた。その際に重要な史料とされたのが、司祭たちを監督する司教たちによる布告、いわゆるカピトゥラ・エピスコポールム（司教条令、あるいは彼女の学位請求論文のタイトル中に見られるように司教令 *episcopal statutes* とも）であり、また、彼ら司祭たちの活動に関連して使用された手稿本群である。ファン・ライン博士は、手稿本それぞれに記された内容（説教、典礼や儀礼の手順、贖罪規定など）を分析することで、司祭たちが実際にどのような知識を持って活動していたのか（あるいはそうあるべきと期待されていたのか）を明らかにしてきた。第一講演を依頼したのは、彼女のこの方面での研究に筆者が関心を持っていたこと、また講演でも言及されるオルレアン司教テオドルフの司教条令を、2024年度に筆者が開講していた大学院ゼミで輪読していたことなどを背景としている。

こうした司祭の手に届くところにあった手稿本に収録されていたのは、しかし、いわば「純粹に」キリスト教的なものだけではなく、医療や予知に関わるものなど非宗教的なものも含

め、多岐にわたるテキストがそこかしこに見出せるのである。こうしたテキスト群が初期中世社会でどのような意味合いを持っていたのかを探ることもまた、ファン・ライン博士の主要研究分野の一つとなった。第二報告は、この方面での研究成果について予知を中心に語っていただいたものである⁽³⁾。

さらに言及しておくべきは初期中世社会における贖罪に関する研究である。贖罪はデ・ヨング教授を中心としたユトレヒト大学での中世史研究における中心的トピックの一つであったが⁽⁴⁾、ファン・ライン博士も『偽テオドルス贖罪書』の校訂に携わっており⁽⁵⁾、同テキストを含む様々な贖罪関連テキストやそれらを収録した手稿本を分析した論文も刊行している。今回の来日時には、2025年3月4日に東京大学で開催されたワークショップ“Norm, ideal, and practice of secular/regular religious life in the Carolingian local society”において“Penance in Carolingian pastoral manuals: norms, ideals, practices”と題した研究報告もしていただいている。残念ながら同報告の翻訳を今回同時に公刊する事はできなかったが、これについては別の機会を期したい。

今回の講演会実施や翻訳公刊にあたっては多くの方々から力添えをいただいている。第一講演の実施にあたっては、東京大学大学院人文社会系研究科の国際人文学プロジェクトの支援を得た。第二講演は、筆者を代表とする科研費プロジェクト（研究課題番号19KK0014）によるファン・ライン博士の招聘事業によって可能となった。この場を借りて感謝の意を表したい。最後に、拙訳の『青山史学』掲載をお認めくださった史学科スタッフの皆様、実務に携わってくださった編集委員の先生方に厚く御礼申し上げる。

注

- (1) 2007年に叢書Cultural Encounters in Late Antiquity and the Middle Agesの第6巻としてBrepols社から刊行された。
- (2) <https://www.uu.nl/staff/ACvanRhijn/Publications>
- (3) 300年から1200年にかけての「匿名の知識（Anonymous Knowledge）」に関してはアムステルダム大学のイレーネ・ファン・レンスヴァウデ（Irene van Renswoude）教授との共同研究プロジェクトが進行中である（<https://www.huygens.knaw.nl/en/projecten/anonymous-knowledge-2/>）。予知に関わるテキストもこうした匿名テキストに含まれる。医療知識については、イギリス・セントアンドリュース大学のジェームス・パルマー教授（James T. Palmer）やノルウェー・オスロ大学のクレア・バリッジ博士（Claire Burrige）らと、医療関係テキストを収録した初期中世手稿本のオンラインデータベースCorpus of Early Medieval Latin Medicinを2025年に公開した（<https://cemlm.wp.st-andrews.ac.uk/handlist/>）。
- (4) 例えばMayke de Jong, *The penitential state. Authority and atonement in the age of Louis the Pious, 814–840*, Cambridge, 2009やRob Meens, *Penance in medieval Europe, 600–1200*, Cambridge, 2014などが挙げられる。
- (5) *Paenitentia – Paenitentiale pseudo-Theodori*, ed. Carine van Rhijn (Corpus Christianorum Series Latina 156B), Turnhout, 2009.